円覚341号 目次

横田管長のお話
「無事ということ」 …… 1
管長のページ …… 8
信心ことはじめ㊵ …… 10
鈴木大拙の言葉と生涯（十）／蓮沼 直應 …… 12
直感的に感じる心／桜井 竜生 …… 16
円覚寺の至宝⑥ …… 20
精進料理レシピ／藤川 譲治 …… 22
お彼岸、どう過ごす？／横山 友宏・由馨 …… 24

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所

横田管長のお話

無事ということ

書を頼まれますと、「無事是れ貴人」と書くことがあります。言葉を聞いただけで、なんとなく「無事」でいることが貴いと感じることができます。しかし、この「無事」という言葉には実は深い意味があります。

「無事」を『広辞苑』で調べてみると、「取り立てて言うほどの変わったことのないこと。事変のないこと。危険、災害、大過などが起こらない状態。平穏。つつがないこと。健康なこと。自然のままで何も人為を加えないこと。ひまなこと。なすべき事がないこと」などという意味が書かれています。

私たちが神仏にお祈りする際には、いろんな願い事をすることもあろうかと思います。私自身は、神さま仏さまにはお願いをするのではなく、感謝をするのだと教わってきましたので、手を合わせて「おかげさまで、ありがとうございます」と感謝だけしています。

人の願い事はさまざまです。親は子供に

さまざまな望みや願いを抱きます。どうかうちの子が試験に受かりますように、どうかうちの子が良いご縁に恵まれますようにと、いろいろ望みを託すことも多いかと思います。しかし究極の願いは何でしょうか。

親はいろんなことを願いますが、もしもその子がいなくなってしまったら、何を願うでしょうか。良い学校に入ってほしいとか、親の言うことをよく聞いてほしいといったことは思わないものです。願いは必ず一つ、どうか無事で生きていてほしいということに尽きます。無事でさえいてくれればいいと心から願うことでしょう。無事で生きてさえいればいいという、これこそが究極の祈りではないかと思います。

ものの本当の値打ちというものは、残念ながら、無くした時か、あるいは無くしかけて、初めて気がつくものであります。人はみな無事でいること、これほど貴いことはないのであります。

この「無事」という言葉は、『臨済録』という書物ではたくさん出てきます。「無事是れ貴人」という言葉も『臨済録』にある言葉であります。『臨済録』には「無事」という言葉が十九回ほど出てまいります。それほどに多いのです。

臨済禅師が説かれる「無事」というのは、自分自身が仏であると信じて、外に向かって求める心が止んだことをいいます。今ここでこうして話を聞いている、これが仏だと信じて、外に仏を求めないことだというのです。外に向かって求める心が止んだ時を「無事」という、これが臨済禅師の教えなのであります。

もう数年前のことですが、この「無事」を若い人たちにも分かりやすく伝えるために、こんな譬(たと)え話で表してみようと思いました。ちょうど上野動物園の前を通りながら、ふと思い付いた話なのであります。

上野動物園に、多くの人がパンダを見に集まっています。そんな情景を目にしつつ思い付いたのです。もしもパンダを見るために並んでいる行列に、パンダがいたらどうなるでしょうか。

みながパンダを見たいと思って並んでいます。その中にパンダが並んでいるのです。そのパンダは自分がパンダであることが分かっていないのです。だから多くの人がパンダを見ようと並んでいるのを見て自分も見たいと思ったのです。するとまわりの人はそのパンダに言うでしょう、「あなたはパンダです、ここに並ぶ必要はありません」と。そうしてパンダは行列から追い出されてしまいました。

追い出されたパンダは、嘆き悲しみました。私もパンダを見たい、パンダを見られる人たちをうらやましく思いました。パンダというのは、どんな姿をしているのか、図書

館で図鑑を見て調べてみました。

さらには自分もパンダのようになれないかと考えるようになってゆきました。そこで、目のまわりに墨を塗ってみたり、笹を食べようとしてみたり、さまざまなことに挑戦してみたのです。それでも自分がパンダであるとは気がついていません。パンダを見たい、自分もパンダのようになりたいと頑張っているのです。でも、なろうと思えば思うほど、なることのできない自分に落胆してしまいます。

そうしてもがき苦しんでいる時に、たまたまぬかるみで転んでしまい、ずぶ濡れになってしまいました。顔についた泥を拭いながらふと見ると、水たまりにパンダの姿が映っています。今水に濡れて、その水を拭う様子が同じように水面に映っています。

自分の動作と同じように水面に映るものですから、その瞬間にパンダは気がつきました。水面に映っている映像は、まごうことなきパンダです。そしてそれは自分の姿であると気がついたのでした。

パンダは大喜びです。なんとなれば長い

間見てみたい見てみたい、なりたいなりたいと思い続けていたパンダは、自分自身だったのです。そう気がついてみると、今度はもうパンダの行列に並ぼうなどと思いません。無理に顔に墨を塗る必要もありません。どこで何しようと、そのままの姿でパンダなのです。そうしてもうパンダを探し求めることなく、パンダはパンダであることにくつろいでいるのです。そんなパンダの姿を見てはまわりの人もみな癒やされているのです。

このパンダというのは仏を表しています。仏とは、慈悲に満ちた理想の人格であります。私たちは銘々が本来仏でありながら、そのことに気がつかずに、仏を見たいと思って、お寺の本堂にお参りしたり、あるいは仏像展に並んだりしているのです。実は、並ん

でいるその人が仏なのです。ところがそのことに気がついていないのです。

そこで、パンダがパンダのマネをしようとしたように、仏像のマネを始めます。それが坐禅でしょう。仏像のマネをして坐っています。仏になろうと努力をするのです。パンダがパンダになろうと努力したように。『臨済録』にも繰り返し、あなた自身が仏なのですと説かれています。しかし、そのことが信じきれないので、外に向かって仏を求め廻っているのです。

仏像を拝んだり、書物を読んで学んだり、仏のマネをすることを繰り返して、ある時ふと「あれ、自分自身が仏であったのだ」と気がつくことができるのです。そうすると、もう仏を外に求めて廻る必要はないのです。仏のマネをする必要もないのです。パンダがわざわざパンダのマネをしなくても、どこにいても何をしていてもパンダであるように、私たちもどこにいようが何をしていようが、仏なのであります。そうして外に求める心が収まってくつろいでいる状態を「無事」というのであります。

無事の人になればどうなるでしょうか。パンダがパンダであれば、それだけでまわりの人に安らぎを与えられるように、無事の人になっていれば、そこにいるだけでまわりの人に安らぎを与えられるのでしょう。

ゆったりくつろいでいれば、それで自然とまわりの人たちも癒やされてゆくのです。たき火のまわりにいると、自然とあたたかくなるように、無事の人のそばにいると自然と心があたたかくなるものです。

こんなパンダの話を思い付いて、大学で学生さんたちに話してみました。何度か話をするうちに、この話を絵本にしてみたいと思うようになりました。そう思っていると、協力してくださる方が現れてくれました。

ご縁が実って、静岡市清水区のお寺の副住職のご令室である横山由馨様が、パンダの絵を描いてくださることになりました。そうして昨年末に絵本『パンダはどこにいる?』ができあがりました。

多くの方にこの本を通じて、自分自身の素晴らしさに気がついて「無事」を学んでほしいと願います。